

Title	続『アンナ・カレーニナ』題銘考
Author(s)	法橋, 和彦
Citation	大阪外国語大学学報. 14 p.39-p.61
Issue Date	1963-12-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80226
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

続『アンナ・カレーニナ』題銘考

法 橋 和 彦

НЕКОТОРЫЕ НАБЛЮДЕНИЯ НАД СМЫСЛОМ ЭПИГРАФА К “АННЕ КАРЕНИНОЙ” (ПРОДОЛЖЕНИЕ)

хокке кадзухико

ОГЛАВЛЕНИЕ

§ Введение

Статья В.Ермилова об эпиграфе. Лекция А.Луначарского “Толстой и наша современность”. Перемена точки зрения исследователей об “Анне Карениной” в ленинскую — сталинскую эпоху. Полемика о композиции романа в русской и советской критике. Взгляды модернистов на “Анну Каренину”.

§ 1

Некрасов по отношению к эпиграфу. “Анна Каренина” в дореволюционной критике. Смятение и несходство в оценке романа. Проблематическая методика в статьях С. Бычкова и И.Успенского. Основные принципы Ленина о Толстом.

§ 2

Достоевский об эпиграфе. Значение его взглядов на <виновность и преступность человеческую> в “Анне Карениной”. Моё отношение к объяснению Достоевского.

§ 3

Беседа Толстого с Н.Русановым. Толстой в отношении к статье М.Громеки. Смысл романа и эпиграфа в статье Громеки. Прославление законного брака и общественного мнения. Реакционное объяснение об идее эпиграфа. О глубоком сочувствии к Анне в

русской публике. Анна, как жертва протеста—в одном ряду с героическими женщинами в русской литературе.

§ 4

М.Алданов об эпитафье. Загадочный эпитаф и суровый приговор о судьбах Анны и Вронского. Сомнение в моральной тенденции в статье Громеки. Об отсутствии элементарного условия справедливости в романе. Эпитаф как чудовищная формула.

§ 5

Случайная встреча В.Вересаева с М.Сухотиным. Остроумное объяснение Вересаева об эпитафье. Разорванная надвое Анна как жена и как мать. Что такое <живая жизнь>? Простой ответ Толстого на высказывание Вересаева об эпитафье.

§ Заключение

Смысл <дурного> в толстовском понимании. Пафос самого Толстого в эпитафье. Как понимать смысл<и> в следующей фразе:<…испытала на себе и Анна…>. Не связаны ли смысл эпитафья в романе с обеими темами Анны и Левина? Внутренняя связь эпитафья со судьбой мученика-Левина. О взаимоотношении левинской темы с “Исповедью”.

み い だ し

はじめに（題銘と二つのテーマについての問題）	159
『アンナ・カレニナ』をめぐる評価の混乱について	162
ドストエフスキの題銘理解とその批判	165
グロメカ論文をどのように考えるべきか	166
アルダーノフ論文の意義	170
ヴェレサーエフの題銘考について	172
おわりに（トルストイにおける「非行」の意味と『懺悔』）	175

は　じ　め　に

とし「大衆古典文学文庫」のシリーズにエルミーロフが『アンナ・カレーニナ』論を書いている。⁽¹⁾この小冊子のおもて表紙みかえしには、著者の論点の骨子がつぎのように集約されている。

「レフ・トルストイは自分のヒロインを非難しているのでしょうか、それとも正当化しているのでしょうか？　コンスタンチン・レーヴィンのたえまなくつづく苦悩にみちた精神的探求の内容はなにか？　この小説におけるアンナ・カレーニナのテーマとコンスタンチン・レーヴィンのテーマとのあいだには結びつきがあるのか？　トルストイが小説の題銘として提起したく復讐は私がすることである、私自身が報復する」という言葉の意義をどのように理解すべきか？」

うえの四つの疑問符は『アンナ・カレーニナ』の作品美学と題銘との内的関連にエルミーロフの力点がおかれていることを示している。作品美学との関連において『アンナ・カレーニナ』にえられた題銘の問題性は、四半世紀をしめるスターリン時代の研究ではかえりみられなかったものである。⁽²⁾

ふりかえって、レーニンのよき時代においてはどうだったか。

たとえば、政府要員として活動した文芸批評家ルナチャールスキイはトルストイについてかずかずの労作をものしている。⁽³⁾彼がトルストイ生誕百年記念祝典にさいして講演した『トルストイとわれらの時代』⁽⁴⁾のなかには、題銘の問題性がつぎのようにとりあつかわれていた。

この題銘は——「トルストイがアンナ・カレーニナを罪人としてあつかっていることを示している。彼は物語全体をこの方向へ導こうとした。それにもかかわらず小説そのものにおいて、彼は、キティ・シチェルバーツカヤもアンナ・カレーニナを敬慕したし、またおなじくこの小説の全読者も彼女に敬慕の念をいだいたことを示している。それは、この女性のうちに生命力があるからだ。彼女の愛情への、また自由や幸福への激情がいたく偉大であり、それがわれわれの心をとらえ、われわれを説得するからなのだ。トルストイはこれが罪過だときめつけている。アンナ・カレーニナの体内をつらぬいている一本の赤い糸は、彼女の情欲への渴望である、彼女自身がえらびとったあの雄への欲望であり、教会と慣習が彼女をとりもったところの冷血漢カレニンへの欲望ではない。したがって彼女は、あのようなふるまいをあえてした代償として、汽車の車輪の下で非業の死をとげることになるのだ。ここに内面的な形而上学的意味が存在する。すなわち、幸福を欲するものは破滅する。なぜなら幸福というものはまったく人間の運命ではないからだ。考えなければならないのは、幸福や愛情についてではなく、義務についてである。人妻なら

肩に綱かけて重荷を曳くべきである。もし子供があるなら母親としての義務をはたすべきである。この運命をかえる権利はない——それはエゴイズムであり罪過である。

なぜトルストイはこうに説示したのか、なぜ彼はあれほどのペエジをこの〈高級な〉倫理に割愛するのか？ じつのところ彼自身は生活を愛しており、愛というものをこの世で一番すばらしい人間性の開花として描きだしている——なのに、彼はまた同時にその開花をふみにじる。なぜか？

その理由は、彼が自分自身のなかでこれをふみにじってしまったからである。彼は生活に対する気ままな欲求をみずから内部でおしころす。なぜ彼はこの幸福を憎しみぬくのか？ この問題にはのちにたちかえることにして、いまここで重要なのはつぎの結論だけである。『アンナ・カレーニナ』が書かれた70年代にトルストイは貴族を崩壊しつつある階級として描いた。貴族階級はもはや花を開くことがない。この階級はあらゆる欲望をはらんでいる。それはもはやいままでたしかにつづいてきたかぐわしい開花ではない。それはすでに混乱であり、罪過であり、またその階級的地盤の部分的な譲渡である。⁽⁵⁾

題銘の意義に関するルナチャールスキイの発言は、いくぶん単純明快にすぎる断定のそしりをまぬがれない。彼はトルストイ生誕記念行事の政府代表委員の資格で発言した。そのかぎりにおいて彼の図式的な題銘解釈もあながち責めるべきではない。

しかし彼の論点には、のちに政治と文学の関係における、とくにトルストイの全体像の把握における方法論的な陥穽がみとめられなくもないことをここで指摘しておく必要がある。その陥穽は、創造の主体であるトルストイに関する幼稚な二元論、つまり芸術家としてのトルストイを哲学者ないし思想家としてのトルストイにするどく対立させ、前者にリアリズムの勝利を予定する図式にある。⁽⁶⁾

ここには、かつて1905年のブルジュア革命の敗退後、レーニンのトルストイ理解と政治的にも美学的にも鋭い対立を示したプレハーノフの急進的政治主義⁽⁷⁾やフリーチェの俗流社会学的なトルストイ⁽⁸⁾に対するプロクルトスの斧を、方法論的にもいとおこさせるものがある。彼等のトルストイに対する断罪のすべてが不適切であるというのではない。しかしながら、彼等の政治的観測の優位性に基礎をおく文学理解における二元論的な観点は、トルストイ文学の創造の核心とその美学的評価の全問題性に正しく光を投射するためのたすけにはならない。

いまここでは、スターリン時代におけるトルストイ研究の主流が、こうした非弁証法的な二元論によりひどくそこなわれてきたことだけを指摘しておきたい。言葉をかえせば、よきレーニン時代におけるルナチャールスキイが、有名な『アンナ・カレーニナ』の題銘を問題提起の一環と

なしえたこと、このこと自体がスターリン時代におけるトルストイ研究には無用とされたのだ。

くりかえすまでもなく、私がこの点にこだわる理由は、スターリン時代の『アンナ・カレニナ』研究の主流が題銘解釈を不問にふしてきたからである。そして不問にふすことによって前進しえなかったからである。

題銘に著目するあまり、かつては不遇におわった傍系の研究もいまでは公開されている。学報12号に紹介した故エイ・ヘンバウムの⁽⁹⁾研究はその最たるものである。エイ・ヘンバウムはトルストイ研究に関するかぎりたゞしく異端的であった。異端であることによって、彼の題銘解釈への努力は無視されたのだ。⁽¹⁰⁾

では、謎めいた題銘の意味と関連して、『アンナ・カレニナ』の問題性はスターリン時代の研究において、ルナチャールスキイからどのようなかたちでうけつがれてきたか。

言うまでもなくルナチャールスキイは、題銘の意味するところのものとアンナの芸術的形象を鋭く対置することによって、トルストイの創造的全矛盾を「こんにちの労働者階級の見地から」⁽¹¹⁾とらえようとした。レーニンの適切ないましめにもかかわらず、⁽¹²⁾スターリン時代の研究は題銘を無力化することによって、より露骨に労働者階級の政治的見地を前面におしだした。『アンナ・カレニナ』論の運命的な不毛はここに問題がある。

なぜなら、この見地を固執するかぎり、作品美学の検討にさいしては、心理的にたゞしく自伝的なトルストイの主人公＝レーヴィンのテーマについての混乱した理解が必然的に招来されるからである。そしてこれは事実として危惧におわらなかった。

たとえば、ロジデェストベンスキイは『アンナ・カレニナ』の小説構造に関する研究⁽¹³⁾において、いちおう構成上の統一をみとめたうえで、実際には「二つの小説が機械的に結合された小説」という見解をおしだしている。つまり、彼によれば、レーヴィンのテーマは作品美学を破壊するものである。

奇異なことには、『アンナ・カレニナ』に関するかぎり、こんにちのモダニズム文学批評の主張がより一層独断的にこうした見解をかかげていることである。

エドウィン・ミューア⁽¹⁴⁾やパーシイ・ラボック⁽¹⁵⁾は、小説主題におけるレーヴィンの筋書の無用性を実証しようと試みている。またわが国でも、戦後まもなく近代文学同人のてがけた『ロシア作家研究』がその好個の範例を示している。トルストイ肖像の責任報告のなかで本多秋伍はつぎのように⁽¹⁶⁾のべている。

「レーヴィンの系統の人物には、芸術作品の中の人物として沢山の問題がある。これは人物として問題があるのみならず、作品全体の構成から言っても、おまけのようなのだともいえる。」

つまり、「レーヴィンの恋愛、結婚、家庭という側面」をきりってしまったほうが「一層クッキリした作品ができたのではないかという感じがする。」

私はさきの題銘考において、レーヴィンのテーマが不在であるかぎり、完全な悲劇としてのアンナのテーマが成立しえなかった理由をほりおこすことにつとめた。論者の批評的立場がなにであれ、アンナの悲劇と題銘の意味を直線的に結びつけることから小説構造そのものを非難する発想においては、トルストイ＝レーヴィンの創造的課題がもののみごとに看過されてしまうのである。

ところで、スターリン時代に特徴的なトルストイ論とモダニズム文学批評との『アンナ・カレニナ』論における二つのテーマの是非に関する奇妙な美学的見解の相似はどうしたことなのか。両者の内容を決して同日にあつかうことはできないが、結論的にいえることは、前者が作品美学の方法論に関して、政治の優位性のもとに、実は政治と文学とを両断する評価を先行させ⁽¹⁷⁾、後者が形式美学的な主体的観測の限界を、かえって力と頼み楯とすることの頑くなさから出発して、内容と形式の弁証法的統一の理解に盲目であるからだ。

1

作品『アンナ・カレニナ』について、一連のこうした中傷や誤解は、しかしながらいまにはじまったことではない。

ラチンスキイは1878年1月6日付のトルストイにあてた手紙のなかで、小説構成上の「基本的な欠陥」を指摘した。

「この小説には建築様式というものがありません。そこにはどうしても結びつきようのない二つのテーマが並列のままで発展しています。⁽¹⁸⁾それもたがいにだんだんと豪勢に展開しています。」

それに対して、トルストイは同年1月27日につきのような返事を書いた。「《ア・カレニナ》についてのあなたの意見は、私には正しくないように思えます。私はかえってその建築様式を誇りにしています。丸屋根はどこにつき目があるか気づかれもしないように葺かれるものです。それで私がいちばん苦心につとめたのはこの点です。建物の緊接は筋書や人物相互の関係においてではなく、内面的ななかかりむすびにおいて施されています。……私の懸念は、あなたが小説を走り読みしてすぐに、その内面的な内容に目をとめられなかったのではないかということです。⁽¹⁹⁾」(傍点——執筆者)

公正にみるところ、ラチンスキイはその手紙の後半の内容からおして、『アンナ・カレニナ』の構成上の不備を一面的に非難したのではなかった。むしろラチンスキイに対するトルストイ

の抗議のほうが一方的であった。このやりとりにも、かつてトルストイがストラホフやショペンハウエルの女性問題に対してみせたつよい関心と、一方それに相反するようなポレミックな問題意識の独自性がよみとれる。⁽²⁰⁾ 誤解を招きやすいトルストイの問題意識の所在にかかわりなくいえば、ラチンスキイは『アンナ・カレーニナ』の終幕まじかに描かれたアンナとレーヴィンの奇遇を賞讃して、「ここに物語のすべての糸を結びつけ、完全に統一された終幕をこの物語のために確保する機会が現出されている」ことをたかく評価したのである。⁽²¹⁾

『アンナ・カレーニナ』の作品構造と二つのテーマに関するラチンスキイの感想は、その同時代人であった、たとえばカトコフの見解と完全に対立的な内容をもつものであった。カトコフは周知のように、トルストイが『アンナ・カレーニナ』を連載していた「ロシヤ報知」誌の経営者として、アンナの自殺とともにこの小説は完結されたものと主張した。そしてレーヴィンのテーマが追求される最終篇の掲載を拒む権利を保留した。⁽²²⁾

こうした評価のくいちがいは題銘の意味と二つのテーマの構成上の問題をめぐって尖鋭化されてきた。さきにふれたように、ロジデストベンスキイは『アンナ・カレーニナ』の筋書が「外面的にたがいに無関係に展開していく」ことに注目した。プールソフはブラゴイ監修になるトルストイ研究書のなかで、ロジデストベンスキイの観点を拒否して、彼は「若干の革命以前の批評家と軌を一にしている」と批判した。⁽²³⁾

革命以前においては、とくにトルストイと同時代の進歩的文壇から『アンナ・カレーニナ』は不評をかった。文壇の主流はトルストイの小説の内容と謎めいた題銘を皮肉にこじつけた。『アンナ・カレーニナ』は彼等の評価において、彼等の政治意識とは無縁であったし、プロパガンダ的な啓蒙の意義ももたなかった。

トルストイ、きみは忍耐と才能をもって、
くよろめき>はまかりならぬと証言なさる
たとえ相手が侍従補や侍従武官であろうとも、
妻たり母たる女性には。⁽²⁴⁾

このようにネクラソフは題銘の「寓意」^{モウーリ}を即興的に冷笑している。彼等にあっては、題銘をめぐり問題への関心は一時の座興にしかすぎなかった。

とくに、この小説が連載されはじめた当初の反響はかんばしくなかった。1875年3月30日、スターソフは「ロシヤ報知」誌に『アンナ・カレーニナ』の最初の二篇が発表されたあとで、トゥルゲーネフへの手紙に「力なくよわよわしい」「あまりいい出来ではない」と書いている。⁽²⁵⁾ 1875年5月13日、トゥルゲーネフはポロンスキイにあてて、「この小説は好きになれない」とのべて

いる。その理由として、「どこもかも未熟で、モスクワ、抹香、オールド・ミス、スラヴ風土、貴族趣味、等々の匂いがする」ことが列挙された。⁽²⁶⁾

のちに『アンナ・カレーニナ』が完結をみたとき、スターソフもトウルゲーネフも最初の印象を撤回している。だが一般に進歩的世論がこの作品を疑問視していたことにうたがいの余地はない。シチェドリンは『アンナ・カレーニナ』の最初の幾篇かが発表されたとき、この作品を辛辣に風刺したパロディを書こうとまで考えている。⁽²⁷⁾

トルストイの同時代人にとって、『アンナ・カレーニナ』を正当に評価することがいかにむづかしいものであったか。前世紀においてばかりでない、こんにちのソビエト文芸学においても、この作品にくわえられた一面的な評価や単純化された解説がすくなくないのだ。

ブイチコフは数年前「ロシヤ小説文庫」シリーズの『アンナ・カレーニナ』のあとがきで、この作品をネクラソフの『誰にロシヤは住みよいか？』と比較して、ほぼつぎのように書いている。⁽²⁸⁾『アンナ・カレーニナ』には、ネクラソフの深みと鋭さで、ロシヤ生活の諸矛盾が開明されていない。なぜなら、トルストイは農奴制改革後の農民の苦しい生活状態を直接に再現しなかったからだ、と。

ウスパンスキイは1953年、モスクワ科学アカデミイの特別記念トルストイ会議で、『アンナ・カレーニナ』に関するつぎのような報告をおこなっている。「悲劇をこの小説で体験しているのは支配階級の環境からでた主人公たちである。だが国民の形象は生活肯定にみたされている。…個別的なさまざまな人間悲劇、さらには一社会のある階層全体の悲劇でさえも、歴史の創り手である国民の生活肯定的な力を矮小することはできない。これがこの小説の主要な思想である。」⁽²⁹⁾

彼はなにを言わんとするのか。社会発展の底辺に関する一般論をもって、彼は『アンナ・カレーニナ』におけるトルストイの主要な思想をくみだてる。そうすることによって彼は改革後のロシヤ現実における正確な社会的＝階級的分析のトルストイ的方法論を無視し、『アンナ・カレーニナ』における主要主人公の生活史から国民の運命に関する問題を提出する権利を放棄した。彼は国民的課題をアンナとレーヴィンの運命以外の場所にさぐりだそうと試みたのだ。

あらためて指摘するまでもなく、こうした一連の発想と論理には、「わが国ではいまなにもかもひっくりかえってしまって、それがやっとなのえられつつあるところだ」というトルストイの発言に注目して、「1861年から1905年にいたる時期のこれ以上に正確な性格づけを思いつくことはむづかしい」⁽³⁰⁾とのべたレーニンのトルストイ評価に関する原則からの逸脱が顕著である。

『アンナ・カレーニナ』の評価をめぐる問題性について、いままでのべてきたことは、私がこの作品に注目する視点をあきらかにしておきたかったからである。私は以下この論文において、

革命以前における諸家の『アンナ・カレニナ』論を、題銘と二つのテーマに関連して考えてみたいと思う。

2

『アンナ・カレニナ』に対してトルストイの同時代人のうちで、特別の関心を表明したのがドストエフスキイである。彼は「人間の原罪性と犯罪性」という命題からこの小説に著目した。

ドストエフスキイにとってこの命題は、世界における一切の人間悲劇のうちにひそむ不可知なものを意味している。彼はこの創世紀からの命題の新しい解答を『アンナ・カレニナ』に読みとろうとした。

アンナが産褥熱におかされ危篤状態にあるとき、彼女の懇望によって夫カレーニンと情夫ヴロンスキイが和解し、ともに人間的硬直から脱していく情景描写にふれてドストエフスキイはつぎのように書いている。

「人間の魂のなかには、医者をはるかに深く悪の病根がすくっているのだ。どのような社会制度にあっても悪はさけられない。人間の魂はいつまでも同じ状態にあらう。常規の逸脱と罪悪は人間の魂そのものに源をもっているのだ。人間の魂の法則はまだはなはだしく不分明であり、とても科学では理解できず、あまりにも茫漠としており、神秘につつまれていると結論できよう。したがって、これをいやす医者も最後の審判者も存在しないし、存在しうるはずもない。存在するのはただく復讐は私がすることである、私自身が報復する」と叫ぶなにかだけである。——これらの事実がはっきりと一点のくもりもなく理解される。そして、このなにかにのみ、この世の一切の秘密と人間の窮極の運命とがしらされているのだ。さらに長い年月を聞かないかぎり、人間は完全無欠さの誇りをもって何事をも決することができないのだ。」⁽³¹⁾

ドストエフスキイはなによりも彼自身の命題から出発して題銘を理解し、トルストイの思想がこのような「人間の魂の心理学的研究において」語られていると考えた。彼はそこに、「それはすさまじいばかりの深みと力、わが国ではいまだかつてみられなかった芸術的描出のリアリズムを伴っている」ことを指摘し、おしみなく賞讃した。

しかしドストエフスキイの題銘理解は、アンナの最後の運命の展開に関する考察を完全に欠いている。またレーヴィンのテーマは完全に黙殺された。

トルストイは、はたして、ドストエフスキイの命題の恥部にかくされていたような「医者を

なのる社会主義者」への反論としての挑戦状を意図していたのだろうか。

『アンナ・カレーニナ』の最初の構想においても、また初期の諸成稿においても、トルストイは姦通にはしる女性をはっきり描きだすとともに、虚偽に支配され、空疎で墮落した上流社会と対照的にレーヴィンの形象を描き示している。もしドストエーフスキイがレーヴィンや彼をめぐる諸人物に「医者なのる社会主義者」との近似の影を念頭においたのならば、それはあきらかに彼の誤解である。トルストイはレーヴィンの実兄にあたる共産主義者ニコライの不幸な形象をもこうした観点から描いていないからだ。

アンナのテーマにおいてもトルストイはドストエーフスキイの主張におけるように、不可知論の立場から善悪のさばきをはっきりと拒否したのだろうか。ドストエーフスキイの題銘解釈はこの点でも、トルストイの初期の構想と最終的な小説の全内容に矛盾しないだろうか。

3

残念ながらドストエーフスキイの解釈はこんにちまで読者や批評家に満足をあてえていない。問題はトルストイが罪悪や犯罪に関する原罪の問題の解決を神の意志にゆだねたという点にあるのではないからだ。神の問題はひとえに作者トルストイの沈黙の意志にかかっている。問題は、したがって、人倫の常規を逸した廉をもって、アンナに「報復」することをトルストイが必要であると考えたのか、それとも考えなかったか、という点にある。そして「報復」がもし必要であれば、いったい何ゆえにアンナは有罪を問われるのか、死罪にあたえるような判決をうけるのか、問題はここにしぼられてくる。

ドストエーフスキイのほかに、グロメカが題銘を解釈することによって小説全体の意義をあきらかにしようとした。

トルストイは1883年にルサーノフとの対談において、グロメカ論文を「卓抜なもの」とよび、⁽³²⁾「彼は私が無意識のうちに作品に書きこんだことを解釈した」とのべている。

ルサーノフはトルストイのこの讃辞に同意することができなかった。彼は「……《アンナ・カレーニナ》にそえられた題銘自体が作者の作品に対する意識的な態度を示しているように思えます」と異議をとなえた。トルストイはグロメカへの讃辞をつづけながら、ルサーノフに対してどっちつかずの返答をしている。「ある意味では、多分そうでしょう……ともかく、とてもよく出来た、いままでのうち一番すっきりしたよい論文ですよ！ 私はほれほれしています。ついに《アンナ・カレーニナ》が解釈されたのですよ！」さて、グロメカ論文はつぎのような題銘解釈をおこなっている。

「人間の性欲を勝手きままにふりかえることに価値と堅実さをみとめる信念はひとさわがせて空虚な考えである。この考えでは人間の性欲が感情の一分野、つまり恋愛にふざいする自由の原則のおまけだとよばれているが、こうした自由主義に準ずる信念は、アンナのロマンにおいて致命的ないたでを受けている。作者は恋愛にも規制されない自由なんてものではなく、厳として諸規制があること、そしてそれらに調和して幸福となるも、またそれらを侵犯して不幸となるも、人それぞれの意志しだいであることをわれわれに証明した。こんなに人間の理性に対して身勝手な偽りの勝利を時期尚早にも近視眼的に謳歌している徒輩、人間精神の諸法則なんてものは変更しうるし、そんな拘束力など無視して、手前勝手の抽象的概念にそぐわしくそいつを改造しちまえると考える徒輩、ここではこうした連中には真の自由なんてものはない。家庭に不幸が見舞われないのに家庭が破壊されることはありえないし、また古い不幸のうえに新しい幸福が築かれたためしはない。決して社会的通念を馬鹿にしてはいけない。なぜなら、その通念がたとえまちがったものであったとしても、それはやはり安寧と自由のうちしりぞけることのできない条件であることにおいてかわりはないからだ。この条件への挑戦は最高の恋愛を毒し、傷つけ、冷却させることになる。結婚はなんといっても恋愛の唯一の形式である。この形式のなかで人間と社会とのあいだの紐帯が、やすらかに、自然に、なんの障害もなしにかたちづくられる。これが活動のための自由を維持し、活動に活力と刺戟をあたえ、清純でにごりのない世界を創造し、生活の基礎、源泉、用具をつくりだす。だがこの清らかな家庭生活の基礎は、誠実な感情の堅固な土台のうえにはじめてうみだされるものである。それが外面的な打算のうえに築かれることはありえない。したがって、古傷としてある虚偽の当然の結果として、のちのちに色恋沙汰に浮身をやつすことは、虚偽そのものを破壊はするが、そのことによって何一つ改善せず、ただただ破滅への道がのこるばかりである。それゆえに……〈復讐は私がすることである、私自身が報復する〉……ということになるのだ。」⁽³³⁾

グロメカの題銘解釈は合法的な結婚への讃美と既製のな社会通念の擁護に結局はおわるものなのか。

「こんなに人間の理性に対して身勝手な偽りの勝利を時期尚早にも近視眼的に謳歌している徒輩」への彼の呪詛は、ある意味で「医者をなめる社会主義者」に対するドストエーフスキイの憎悪と共通するものをもっている。しかしながらドストエーフスキイは、グロメカのように楽天的にも、「諸規制と調和して幸福となるも、またそれらを侵犯して不幸となるも、人それぞれの意志しだいである」とは決して考えなかった。つまり彼は社会的な諸規制や通念との妥協が、恋愛に関する人間の幸・不幸に支配権をもっているなどとは考えなかった。まさにその逆である。ド

ストエーフスキイは題銘のなかに完全な決定論をよみとった。したがって彼はリゴリスチックなレーヴィンのテーマを無視しえた。

一方グロメカは、人間には幸福となるための可能性がすべて与えられているという観点にたつ。もしその人間が幸福となるための可能性の活用を拒み、その結果倫落するならば、その罪科は彼自身にある。グロメカはアンナの運命をこの観点からひややかに見下した。彼はそうすることによって、アンナの運命における悲劇的なもの、宿命的な情状を却下した。

上流社交界の日常生活はグロメカによると「安寧と自由のうちしりぞけることのできない条件」のうえに成立している。そこでは、いかなる悪徳が慣習化し、いかなる非行がその誇示を許されていることか。たしかにトルストイのこの小説においては、盲いたエゴイスチックな欲望の奴隷であるようなベートシイ・トヴェルスカヤやステパン・アルカジェーヴィチが安楽な暮らしをつづけている。そればかりではない。この社会の老醜の象徴であるようなヴロンスキイの母はアンナのことを、「いえ、いえ、何とおっしゃってもあれは忌むべき女でした。あの捨鉢な情熱はどうでしょう！ あれはみんなあの女のなかに特別なもののある証拠です」と罵る。

では一体なぜ彼等には「報復」がないのか。答えはしごく簡単である。トルストイは法学者ではなかったし、この小説を法律学のために書いたのではないからだ。そして彼等のケースにおいては犯罪の容疑がないのである。ベートシイやステパンは上流社交界一般の人士と同様に、いかなる倫理とも無縁に、いかなる道徳律にも束縛されずに生活しているからだ。

しかしながらトルストイはこうした人々の「社会通念」を作品の全内容をあげて摘発したのではなかったか。レーヴィンの農村における勤勉で禁欲的な勤労生活は、偽善と無為の充満した社交界とはたして対蹠的に描かれなかったか。たしかに凡百の悪徳や非行は、小説においてではなく、歴史的現実において裁きの庭につれだされよう。しかし、トルストイはそれらについて教訓的な小説を書き、題銘によって至上の正義をうたったのではない。題銘をもしグロメカのように解釈するならば、トルストイは小市民的なモラルの説教をしたことになる。しかもその説教は、アンナの姦通に対する非難にはじまり、凡百の悪徳の弁護におわる支離滅裂な法学者の言葉でしかない。

グロメカの解釈にもかかわらず、最悪の環境にいましめられたアンナは、罪人であるよりは、むしろその犠牲であるかのようにおもえる。『アンナ・カレニナ』の読者が、題銘の解釈をとりこえて、このように作品の内容を理解しなかったと誰がいうことができよう。

一般読者におけるアンナ像は、オストロフスキイの戯曲『雷雨』のヒロイン、カチェリーナの像とむすばれてきた。アンナはカチェリーナの悲劇におけると同様に、破廉恥な倫落の女性と

してではなく、社会的抗議の犠牲者として読まれてきた。こうした女性の運命への同情とそれ以外の運命打開の可能性を彼女たちに与えなかった作者への憤懣は、プーシキン tachyerna 像についても言われてきたことである。

ボトキンは1842年に『エヴゲーニィ・オネーギン』の結末について、オネーギンへの初恋をひめた tachyerna が、夫から去ることについては厳として拒絶した「犠牲的な」選択にふれ、ベリンスキイにつきのように書いている。

「……どのように私がたかく《オネーギン》をみとめようとも、いかんせん、その結末が真実で深く思索された現実的なものとは思えません。しょせん私は、みずからすすんで老將軍への売淫にみずからを運命づける tachyerna の態度に納得できません。」⁽³⁴⁾

tachyerna はオネーギンへの愛情をおしころして、夫への慣習的な義務に殉じた。ベリンスキイも40年代の発言においては、tachyerna に内在的なこうした犠牲的精神に同意できなかった。⁽³⁵⁾

周知のようにプーシキン自身も、完結されなかった諸構想において、tachyerna と同一の状況における別の運命の可能性を考えなかったわけではない。しかし、40年代人の思想と20年代に書かれた tachyerna の行動とのあいだにいかなる矛盾があろうとも、所与の現実とプーシキンがリアルに対決する以上、tachyerna の運命に別の可能性はなかったのだ。レールモントフのヴェーラ・リゴフスカヤも「人の口端をおそれてではなく」、まったく「慣習のために」「やむをえず一身上の幸福を犠牲に」しなかったか。⁽³⁶⁾

彼女たちの悲運の同じメダルの裏面には、専制の圧力にも屈せず、政治犯の夫の許へ、流刑地シベリヤまで極寒の旅を重ねてそのまま、長期の困苦をたえしのんだデカブリストの妻たちの最高の道徳的功業がなかったか。この彼女たちの偉業は、慣習的な夫婦の義務の自覚にあったのではなかったか。

ボトキンは先述の手紙のなかで、「もちろん、あらゆる芸術的作品はそれぞれ別個の世界です。この世界にふみこむならば、われわれはその世界の法則にしたがって生き、その世界の空気を呼吸する義務があります。しかし、われわれがその世界にはない別の概念や原理にひっかかっている場合、つまり以前には道徳的である、高貴な犠牲である、勇気であると考えられていたものが——いまでは道徳的でもなく、ただセンチメンタルだけで、軟弱だと思われるとき、いったいいかに処すべきでしょうか？」とベリンスキイに問いかけている。

この痛哭の問いをとおして、プーシキンの tachyerna にも、レールモントフのヴェーラにも、オストロフスキイのカチェリーナにも、またネクラースフのデカブリストの妻たちにも、そしてとりわけトルストイのアンナにも、彼女たちに共通して、気高く堅固な道徳的資質ゆえの悲劇

をみないではいられない。

トルストイは、はたして、グロメカのアンナ観に自己の主張の同伴者をみいだしたのであろうか。私はかならずしもそうは思わない。私はこの点について、さきの題銘考でふれておいたショペンハウエルの女性観に触発されたトルストイの結婚に関する見解を思いおこす。グロメカへのトルストイの承認は、トルストイ的な地主貴族、レーヴィンのテエマにのみ妥当するところのなくもない、いわば表面的な帰結の相似に左右されたのではなかったか。

アンナの運命とそのテエマは、はるかにグロメカの立論を超えた問題性をもっている。グロメカの題銘解釈は、アンナ論としては不当であり、小市民的モラルの越権的なおしつけではないか。

4

グロメカの題銘解釈には、なにひとつ道徳的思想がないと言いきったとき、アルダーノフは完全に正しかった。彼は書いている。⁽³⁷⁾グロメカの論旨を要約すれば、「口先だけの約束はやめて——しっかり結ばれよ、操をあたえた以上——堅固に身を持せ」という古諺に帰着すると。

グロメカに賛同したトルストイは、デューマ二世やストラホフ、さらにはショペンハウエルの男女問題に触発されてアンナのテエマととりくんだ彼自身の当初の立場ともあきらかに矛盾している。

アルダーノフは題銘の意味にあらためて注目し、『アンナ・カレーニナ』を既製の道徳律でもって解釈する傾向に疑問を投げかけた。

「……謎をひめた題銘である！ 復讐は非常に峻烈である。アンナにとっては——心にのしかかる苛責であり、恥辱であり、死罪である。ヴロンスキイにとってもほぼ同然である。彼はトルコの軍陣に斬りこみ、身を滅すために戦場へ赴くのではないか。だが裁判の形式をとっている復讐は犯罪者たちの実在を前提とする。一体どこに彼等、犯罪者たちは居るのか？ 作者の弁論はモラリストによって構成された起訴状を仮借なく批判した。〈罪科のある〉アンナは作者に愛情と感動をおこさせる。トルストイはこの愛情と感動をうまく隠しおおせなかった。小説のいくつかの場面（たとえばレーヴィンがカレーニナを訪れる場面）では、彼はこうした感情を隠そうともしなかった……私が言うのは、罪と罰との釣合いがとれていないことについてでもなく、また情状酌量すべき点が多々あることについてでもない。われわれをして峻厳きわまりなき形式の支配する至上命令の王国にすまわせたまえ！ だが、『アンナ・カレーニナ』の主人公たちを裁く法廷には、それなくしては裁判が結局くじびきとかわるところのない、もっとも初歩的な正義と

いう条件が欠如している。……万人が普遍的な法律の権威のまゝで平等であること、これが正義のもっとも初歩的な、もっとも型どおりの規制理念である。……しかるにこの条件も、《アンナ・カレニナ》においては言語に絶するあらあらしさでふみにじられた。アンナのくはじらいもなく伸びきった血まみれの死体が駅舎の机によこたわる。だが公爵夫人ベートシイ・トヴェルスカヤは〈cosy chat〉を演じつつ、情夫トウシケーヴィチをルイ15世風の粋をつくした客間に歓迎することをよそうとはしない……ヴロンスキイは〈人間としては、廃人であり〉、作者によって死へと旅だたされる。だが破戒の常習者であるスチーヴァ・オブロンスキイは〈南部鉄道および融資公団の信用相互共同代理委員会委員〉の地位をえて、なんのわずらいもなく生活を享樂している……オブロンスキイやトヴェルスカヤといった連中が氣楽に暮しているその場所で、アンナ・カレニナの死が最高の正義の判決であると考えことはむづかしい。おゝ、われわれは小説の最終章で、口々に呪いの叫びをあげる悪漢が警官によって牢獄に連行される一方、善行の代表者が莫大な遺産を手にいれるといった、あの古風な物語からなんと遠くかけはなれたところにいることか！ だが、われわれが作家に提起するこのささやかな要求を、われわれはまたモラリストにも提起する権利を有するのではないか。一体われわれが目あたりにしているのは何なのか？ この世に真理なし！——という古いうたい文句を耳にたこのできるだけ確認してきた生活のなかの偶然事がとりあげられて、天才的な芸術家の仕上げをうけているのだ。それについてなおそのうえ、こうした偶然事へむかって、ちょうど英国国教牧師の道徳的満悦のために別誂いされたかのような題銘が白い糸をまきこむのである！ 一体なにに対する復讐なのか？ 神学者、モラリスト、公共の社会通念を考慮にいれることを、情欲にかられるあまり願わなくなる人間天性の非論理性に対してなのか？……事件が本質的に検討されない、いわば死の大審院においてアンナに宣告が下されたのだとわれわれが主張する権利はないのだろうか？ 小説の題銘に表現された思想が、公正な神の判決というよりも、むしろお笑い草にちかいとわれわれが考える権利はないのだろうか？……《アンナ・カレニナ》のいくつかの場面がわれわれをいたく感動させ、魂にゆさぶりせるのは、大作家が創造された魅惑的な一群の人物を道徳的な観念に従わせようとするのはかなさに、あるいはわれわれが気づくためかもしれない……われわれのまゝにあるのは、真実の、やけつくような、正真正銘の苦悩であり、罪科あるものはみあたらない……Л. Н. Толстойがその小説で実際に述べたことを簡略に表現すると、われわれはつぎの奇怪な公式をうることになる。すなわち、これらの人びとは一人として罪なし、したがって復讐されてしかるべき者なし。しかし、それにもかかわらず、ある者には〈私が復讐する〉……」

アルダーノフは、ドストエフスキイやグロメカが迷路にひきこんだ題銘の解釈からの抜道を

、題銘の思想を無意味化する勇敢な試みによって、あらたに提供した。彼によれば、題銘に表現された道徳的傾向は、結局のところ、作者が主観的に、自分のモラルを作品に強制して意味づけようとするものの無力の証明にすぎなかったということにつきる。

アルダーノフは作品内容の理解に比重をかけた。そしてその結論的な評価にもとづいて、作品内容から題銘をきりはなした。アンナをはじめ、ヴロンスキイも、またひいてはすべての登場人物は罪過とは無縁であり、したがって題銘の意味は考えようもなく奇体のままにとりのこされる。

しかし、これがはたして題銘評価をもふくむ作品内容全体からおして、ただ一つ可能な妥当性のある理解だろうか。アルダーノフはアンナとヴロンスキイの運命の一致を強調した。アンナの悲劇に一体ヴロンスキイはなんの関係ももたなかったとすることができようか。アンナの悲劇への突進はたしかに雄々しかった。だが歯痛になやむ旅立ちまえのヴロンスキイの姿は嘲笑をかうばかりではなかったか。アンナの悲劇への積極的な姿勢に対して、ヴロンスキイはあくまで受動的で消極的であった。彼はアンナと真の意味で運命的な共同者であったか。アルダーノフは、アンナの悲劇のもっとも直接的な打撃がヴロンスキイのアンナ理解にあった責任をみおとしていゝる。この事実と、ヴロンスキイが仕官の道での立身を断念して資本主義的土地経営に転進したことは無関係なのか。

トルストイの思想的な非力さの証明をもって、題銘解釈への積極的な努力を放棄したアルダーノフの論旨は、さきに紹介したルナチャールスキイの立論の根拠と一致している。スターリン時代の研究者は方法論的にアルダーノフを踏襲した。

題銘はトルストイの思想のたんなる軟弱さの露呈にすぎず、芸術的創造が逆に致命的なトルストイのアキレスの踵をうちくじいたのか。こうした題銘のとりあつかいに疑問はのこらないか。

5

こうした疑問に対して、いま一つの試みがなされた。ヴェレサーエフの『回想』⁽³⁸⁾のなかには興味ぶかい事実が記載されている。

ヴェレサーエフは1907年の春、外国からの帰途、ワルシャワから一人の紳士とクーペをともにした。この紳士はトルストイの娘、タチヤーナ・リヴォヴナの夫——スホーチンだった。当時ヴェレサーエフは、ドストエフスキイとトルストイについて『まことの生活』という著述の執筆中であつたので、スホーチンとトルストイについての話がはずんだ。

ヴェレサーエフはこのとき、つぎのように題銘を理解していることをスホーチンにつたえてい

る。

「この小説で私はトルストイの魂の深層にある本質、つまり生活というものは本来それ自体あかるく歓ばしいものだ、生活は人間の手をしっかりと握って幸福と調和へと導くものだ、もしこの生活のよびかけにしたがわないなら、その罪は人間自身にあるのだという彼の確乎たる信念がわかる。カレーニンとの結婚においてアンナは母となったにすぎず、妻とはなっていない。愛がともなう場合にかぎって明るく歓ばしいものとなることもでき、また愛がともなわないと醜行、虚偽、恥辱にすぎないところのものを、彼女は愛なしにカレーニンにあたえた。ほんとの生活らしい生活はこれに耐えられたものでない。アンナの意志にまるでかかわりのないような力——彼女自身それを感じている——が、彼女をそのゆがんだ生活のなかからほりだして、新しい愛の相手へと投じる。もしアンナがこの力に純粋に誠実に身をゆだねえたならば、彼女のまえにはきっと新しい無垢の生活がひらかれたにちがいない。だがアンナはおののいた。人の口端にのぼる非難や社交界での地位の喪失といった小さな恐れにおののいた。それで、心底からの輝やかな感情は虚偽によってけがされ、禁断の快楽に墮してしまい、いじけて曇ったものとなってしまった。アンナは愛にすがって逃避した。従来は母にすぎなかったアンナは情婦となった。そこで彼女は自然に反したみのりのない愛に生きようとむだなあがきを試みるのである。ほんとの生活らしい生活はやはりまたこれを我慢しきれない。誹謗され、まっ二つに分断された真の生活はアンナの魂をほろぼしていく。もはやこうなってしまうことといえば、最高法廷の正義のまえにただ黙って頭をたれるばかりである。もし魂にひびきつたうひめやかな歓喜のよび声にしたがわず、もし生活によって提供された至上の歓喜をこころ隠してみのがすならば、暗黒と辛吟のうちに破滅するのはいったい誰の罪なのか？ それは自己本来の実存に軽薄にもさからったものの罪である。したがって、その峻厳さにおいて晴天白日の偉大な律法はく復讐は私がすることである、私自身が報復する」と告げるのである。⁽³⁹⁾」

スホーチンはヴェレサーエフの題銘解釈のオリジナリティに共鳴した。瞳をかがやかせながら彼は、ヴェレサーエフに、この解釈についてのトルストイの意見を問いただし、まじょうと約した。そのときヴェレサーエフは、自分の題銘解釈をトルストイがうけつけないことはまずまちがいないとスホーチンに告げている。後日そのとおりとなった。スホーチンの約束の手紙によれば、⁽⁴⁰⁾「残念ながら、彼の回答からわかったことは、彼の方が正しくて、あなたの方がまちがっている」ということであった。スホーチンはつづけてつぎのようにトルストイの意見を書いている。

「まことに遺憾だと申さねばなりません。なぜなら、あの題銘のあなたの御理解が、私には、

Л・Hの理解よりもずっとずっと好ましいからです。それにЛ・Hも、私のみるところ、あなたのお説の方が、彼自身のそれよりもずっとお気に召したようです。すくなくとも、彼の質問に対して、私が彼に、どのようにこの題銘を彼が理解しているかを知りたいという私の所望のいきさつを彼に説明すると、彼はつぎのように申しました。くじつにこれは機智にとんでいる。とてもすばらしいひらめきだ。だが私はくりかえして言わねばならない。私がこの題銘をえらんだのは、すでに説明したように、人倫にもとる非行が、その結果として、人々の側から発するのではなく、神に由来するあの苦しみのすべてをひきかぶるのだというにすぎない。だからアンナ・カレーニナも、その身でもってあの苦しみをあじわったのだ。ほんとに、いまでも憶えているが、私はまちがいなくこのことを言いあらわしたかったのだ。」(傍点——執筆著)

トルストイはスホーチンにこたえたところの言葉によって、本質的には、作品の思想的内容を要約的表現としてのみ、題銘をとりあげた批評や解釈の一切を拒絶したのである。

しかしながら、このトルストイの素朴な発言には、たしかに、題銘をめぐる作品解釈の混乱に終止符をうち、ある種の正解を予想させるものがある。

批評家は例外なく、アンナの悲劇と題銘の意味にこだわりすぎたのだ。トルストイは、「だからアンナ・カレーニナもその身でもってあの苦しみを体験したのだ」と述べている。短い言葉であるが、ここにトルストイ自身の千鈞の重みをもつ精神的苦悩の遍歴の体験を「アンナ・カレーニナも」の「も」に重ねあわせて読みとることができないものだろうか。

題銘の意味は、「人倫にもとる非行が、その結果として、……神に起源するあの苦しみのすべてをひきかぶる」ことをまっすぐに指向している。ここでトルストイの言う「人倫にもとる非行」とは、はたして、アンナの所業のみを指し示しているのであろうか。

否である。なぜなら、レーヴィンのテエマと彼の運命には、アンナ同然の苦しみが、アンナとは別の次元においてではあるが、たしかに存在するからである。彼のキティとの悲恋にも、またキティとの恋の成就における詩的な歓喜の瞬間にも、すでに幸福な家庭生活の国民的保証が、レーヴィンになかったことを示している。このことによって、レーヴィンは、たえず深く沈澱する不安や不幸の予感と束の間の幻想的な歓喜の両極をはげしく動揺する。彼の受難の運命は、彼が国民の受難の運命とふかく交われればまじわるほどさけがたいものであった。ロシヤ生活における動乱過渡の現実からの脱出はどうすれば可能なのか。この彼の深部の危機意識は、アンナと同じく自殺による解決をもって彼にせまらなかったか。

お わ り に

私はさきの題銘考で、新約的でなく、旧約的な金言の正しい理解をトルストイが提出したことにふれておいた。金言の力点は「私に」や「私は」になく、「復讐」と「報復」におかれる。つまりトルストイは、アンナの非行についても、またそのむくいとしての自殺についても一言も批評していないのだ。題銘は、誰のいかなる不倫も、それは不可避免的に、運命的な結末を、そのあらわれ方こそちがえ、やはりなんらかの苦悩という形で招来するものだ、という事実の因果をのべるだけである。この意味でベートシイやスチーヴアがやはりこうした因果の圏外で生活しているという理解は正しくない。トルストイは『アンナ・カレニナ』ののちに、こうした凡百の官吏の一人『イヴァン・イリッチの死』で、彼らにおける苦悩の因果を証明しはしなかったか。そこでも、意識するとしないとにかかわりなく、非行のさけがたい結末は、「人々の側からなされる」復讐ではなく、非行者自身の受難に重点がおかれた。

アンナの自殺は、したがって、当然の大団円である。アンナが身にしみて味わったあの苦悩によって準備されてきた大団円である。問題は自殺という報いそのものにあるのではない。自殺はヴロンスキイでさえ、かって試みたことなのだ。

つまり、スホーチンに語ったトルストイの題銘に関する解答は、題銘のデューマ二世的な図解としてアンナの悲劇を照射するものではなく、アンナの受難の問題性が、レーヴィンの起死回生のテーマとも、深く内面的に結びつけられた地点で意味をもつものであることをほのめかしている。⁽⁴¹⁾

レーヴィンにおける「非行」の意味は、彼が自分の幻想的な願望をロシア現実にうちたてることの可能性をめぐる受難の相位においてたしかめることができよう。トルストイはこのレーヴィンの非行の全貌を、有名な『懺悔』の書において、直接とりあつかっている。

われわれがここではっきりと確認しておかなければならぬことは、小説の題銘が、こうしたレーヴィン＝トルストイの転機とも深く関係していることについてである。『アンナ・カレニナ』の題銘のなかに、作者トルストイ自身が、レーヴィンの起死回生のテーマにおいて、また直接『懺悔』の転機を画した非行の決算において、雄々しく対決したところの、自伝的過去の生活形象との訣別のパトスを、はたして読みとることができないものだろうか。

後 註

- 1) В.Ермилов, Роман Л.Н.Толстого “Анна Каренина”, М.,1963.
- 2) たとえばИ.Н.Успенский, Роман “Анна Каренина”, Творчество Л.Н.Толстого, Сборник статей, М.,1954. (стр.201—278) なおЭйхенбаумの影響をうけて、その内容において斬新な「アンナ・カレニナ」論を展開している БурсовもБилинкисも、理由なく題銘についての考察をのべていない。Б.И.Бурсов, Роман “Анна Каренина”, там же. (стр.220—258), Я.С.Билинкис, О творчестве Л.Н.Толстого, Л.,1959. (стр.280—339)
- 3) Толстойに関する А.В.Луначарский の労作および彼のトルストイ論についての文献は Библиография литературы о Л. Н. Толстом, (1917—1958) М.,1960. によればあわせて 49 篇にのぼる。Литературное наследство, Лев Толстой, Книга вторая, М.,1961.には, К. Н. ЛомуновがА. В.Луначарский о Толстом, (стр.403—405) のなかで, ルナチャールスキイの業績を紹介している。それによれば, 彼は 1911年から35篇以上の論文を発表している。1928年には彼の評論集 О Толстом が出版されている。Л.Н.Толстой в русской критике, М., 1960. (стр.453—499)には, 彼の代表的論文が収録されている。
- 4) ルナチャールスキイのトルストイに関する講演速記録のうち, 未公開のものが三篇ある。そのうちの一篇, Толстой и наша современность は前項のЛитературное наследство (стр.406—426) に収録されている。
- 5) Там же. (стр.415)
- 6) たとえば,この観点から С.П.Бычковは Роман“Война и мир”, Л.Н.Толстой, Сборник статей, М.,1955. (стр.162—219)のなかで, 「戦争と平和」の主要主人公が国民であることを強調し, Толстойは国民の立場にたって個々の人物を評価していると主張した。Э. М. Птичниковаは, Некоторые наблюдения приемами создания образов в романе Л. Н. Толстого “Война и мир”, Лев Николаевич Толстой, Сборник статей о творчестве, М., 1955. (стр.34—61)で, 「道德家トルストイが芸術家トルストイに優位する」場合の好個の例として, Платон・Калатаевの形象をあげている。またТ.Л.Мотылеваは, О мировом значении Л.Н.Толстого, там же. (стр.419—458) のなかで, 「幾百万農民の抗議を反映した破天荒な芸術力」と彼の「宗教的道德的教義」を, まったく別のカテゴリーとして対立させている。
- 7) Г.В.Плеханов, Л.Н.Толстой в русской критике, Симптоматическая ошибка, (стр.317—321) Отсюда и досюда. (стр.326—336)
- 8) В.М.Фриче, О Толстом, Сборник статей, М.,1928.Л.Н. Толстой (стр.279—300)
- 9) Толстойに関する彼の著作目録は, Б.Эйхенбаум, Лев Толстой семидесятые годы, Л., 1960.

の巻末にすべて整理されている。Работы Б.М.Эйхенбаума о Льве Толстом. (стр.287—292)

- 10) たとえば前掲の新書紹介において、А.И.Шифманはつぎのような批判を忘れなかった。「……残念ながら、いつまでも〈古典作家〉としてトルストイをみるエインバウムの古いまちがった見解が克服されていない。トルストイは原則として彼の時代の社会運動の外にたっており、つねに同時代の先進的な立場と葛藤していたというのである。」またエインバウムの題銘をめぐる問題に主眼をおいた論争的な「アンナ・カレニナ」論に対しては、「きびしい真剣な科学的審議に欠けている」と評価されている。Известия А.Н., том xx выпуск 6. М.,1961. (стр.517)
- 11) レーニンのトルストイ評価の原則については、「ソヴェート文学」理想社1963. номер 2「トルストイにおける哲学と文学の間」においてあきらかにしておいた。一執筆者（7 ページ）
- 12) 「トルストイの見解における矛盾は、現代の労働運動や現代の社会主義の見地から評価すべきではなくて、……ロシアの家父長制的村落のうちに発生せざるをえなかったところのあの反抗の見地から評価すべきである。」В. И. Ленин, Лев Толстой, как зеркало русской революции, Л.Н.Толстой в русской критике. (стр.55)
- 13) Б. В. Рождественский, О композиции романа Л.Н.Толстого “Анна Каренина”, Ученые записи моск. гор. пед. ин-та им. В. П. Потемкина, т. 43, кафедра русской литературы. вып.4.М., 1954. (стр.191—220)
- 14) 「小説の構造」佐伯彰一訳ダヴィッド選書1954—ミューは直接「アンナ・カレニナ」にふれてのべていないが、〈年代記小説〉の区分のなかで、「戦争と平和」をとりあげながら、それが〈劇的小説〉と構造上こととなる点をプロットのありかたにおいて強調している。彼の立論からおせば、あきらかにレーヴインのプロットは無用である。
- 15) 「小説の技術」—ラボックは「戦争と平和」について、二つの別々の小説が同居している、つまり人間世界の輪廻の相を描く一方で、民族の国民的なドラマをうつしだし、また一方では主人公たちの〈個人の物語〉でありながら、国民の叙事詩でもある。彼はこの二つの面の遊離についてのべている。この非難は当然「アンナ・カレニナ」の二つのプロットにもあてはまる。（佐伯彰一の解説から）また、ポール・ブールジェは「戦争と平和」や「アンナ・カレニナ」は有機的な構造をもたず、骨格がない。「トルストイはあれだけの力をもっていながら、畸型な構成の才能しかもっていない」と結論する。参照；「小説の美学」アルベール・ティボーデ 生島遼一訳 白水社1953.
- 16) 「ロシア作家研究」早川書房1950 (p.22—23)
- 17) Я.Билинkisはつぎのような従来の研究方法に対する批判的考察をのべている。「わが国では研究対象にあがる作品がうみだされた当時の社会生活の性格づけからはじめて、歴史的一文献的な研究にとりくむのが伝統となった。……しかし多くの場合、この方法によって明らかにされるのは、あれこれの時代の社会的—一歴史的内容に関するあらかじめ周知のテーゼの図解としての芸術作品の解釈なのである。芸術作品が

もしその真の独自性において検討されるならば、多くの点できわめて重要な、かけがえのない現実認識の
一手段となることをわれわれはどわすれしている。」 О творчестве Л.Н.Толстого, Эпохи развития
человека (стр.17)

- 18) Л.Н.Толстой о литературе, М.,1955. (стр. 649—650)
- 19) Там же. (стр.161)
- 20) 「学報12号」 「アンナ・カレーニナ」 題銘考(р.76)
- 21) 1878年4月8日付の手紙でトルストイはラチンスキイに誤解をわびている18)の項(стр.650)
- 22) Б.И.Бурсов, Роман “Анна Каренина”. Л.Н.Толстой. Сборник статей (стр.258)
- 23) Там же. (стр.248)
- 24) Б.Эйхенбаум, Лев Толстой. (стр.189)
- 25) Я.Билинчис, Характеры и время, О творчестве Л.Н.Толстого. (стр.280)
- 26) Там же.
- 27) Там же. (стр.281)
- 28) С.П.Бычков, Послесловие— В кн.: Л.Н.Толстой “Анна Каренина”, М.-Л., 1950. (стр.801—838)
- 29) И.Н.Успенский, Известия отделения литер. и яз. А.Н.СССР, т.х вып.6, 1953. (стр.569)
- 30) Л.Н.Толстой в русокой критике. (стр.74)
- 31) Ф.М.Достоевский. Дневник писателя. 1877 7—8 Б.Эйхенбаум の前掲書 (стр.190)
- 32) Г.А.Русанов, Поездка в Ясную поляну (24—25 августа 1883 года) Толстовский ежегодник 1912 г.М.
- 33) М.С.Громека, Последние произведения гр. Л.Н.Толстого, Русская мысль., 1883, №2—4
引用はЭйхенбаумの前掲書(стр.191)
- 34) Я.Билинчис, О творчестве Л.Н.Толстого. (стр.288)
- 35) Там же.
- 36) М.Ю.Лермонтов, Княгиня Лиговская, Собрание сочинений в 4 томах, том 4. М., 1962.
(стр. 164—259)〈……в жертву правилам,но не молве〉. (стр.204)
- 37) М.Алданов, Толстой и Роллан, т.1 Пг., 1915. Эйхенбаум (стр.193—195)
- 38) В.Вересаев, Воспоминания, М., ГИХЛ, 1939. (стр.440—441)
- 39) Там же.
- 40) Ясная поляна, 23 мая 1907 г. Эйхенбаумの前掲書 (стр.197)
- 41) Л.Н.Толстой о литературе, (стр.153, 646) Н.Н.Страховの「アンナ・カレーニナ」に対する解釈
についてトルストイはつぎのようにのべている。「……私がこんなことをいうのは、私の小説についての

あなたの非難が正しいからです。でも、すべての点においてではありませんつまり、すべてがもっともなのですが、あなたのお説は私が言わんとしたことのすみずみまでいいあらわしてはいないのです。……私が書いたことのすべて、ほとんどすべてにわたって、私をしたがわせたのは、私というものを表現するために、たがいに連結された思想をたばねることの必要性であったのです。しかし、言葉でもってとぎれとぎれに表現された一つ一つの思想は意味をうしないます。思想が表明されるあの連結のなかから一つだけの思想をとりあげるなら、その思想の価値はまったく減じます。（私の考えでは）連結そのものは、思想によってではなく、それとは別のなにかによってくみあわされるのです。したがって直接に言葉によって、この連結の骨組を表現しようなどとはとてもできない相談です。言葉で、形象、行動、状況を記述しながら、ただ間接的に、それが可能となるのです。」（傍点—執筆者）